書き手の伝えようとすることをとらえる「読むこと」の指導
～読解・音読活動の工夫や充実を通して～

福島県教育センター　長期研究員　横山　裕一

１　研究の趣旨

私自身のこれまでの「読むこと」の指導を振り返ってみると、教師主導の解説型が中心であったため、生徒にある程度の分量があり内容的にまとまりのある文章を、自分の力で読んで内容を理解するという機会を与えていなかったように思う。学習指導要領の「読むこと」の指導事項（ウ）は、一語一語の意味や一文一文の解釈など内容の特定部分にのみとらわれることなく、文章全体の概要や要点など書き手の伝えようとすることを正確に読み取ることを示している。さらに指導事項（オ）では、内容を理解することにとどまらず、読み手として主体的に考えたり判断したりしながら読みを深めることで、話の内容や書き手の意見などをとらえることができるようになることを示している。これらの指導事項がめざす力をはぐくむために、まずは、読み取りのための設問の仕方を改善するなど、生徒が自分の力で文章を読解していくための指導を工夫する必要があると考えた。また、語いや表現などの知識を増やすことは読解を促す重要な要素であると考えるので、語いや表現を内在化させるための音読などの活動を充実させる手だても併せて講じていきたい。そこで、以下の仮説や手だてのもと、書き手の伝えようとすることをとらえる「読むこと」の指導について研究を行いたいと考え、本研究主題を設定した。

「読むこと」の指導において、以下の手だて（「２　研究の概要」参照）を講じれば、書き手の伝えようとすることをとらえることができるであろう。

２　研究の概要

(1) 手だて１　読解の工夫や充実

文章を読む前の段階では、話の内容を予測したり、スキーマの活性化を図ったりすることで、内容に対する興味や関心を高め、意欲的に読解に向かうことができるようにする。概要や要点を正確に読み取る段階では、読み取りのための設問の仕方を工夫することで、内容の特定部分だけでなく、段落や文章全体の大きなまとまりに着目できるようにさせたい。さらに読みを深める段階では、直接的には書かれていないが、文章全体を通して書き手が伝えようとすることを推測させるための推論発問や読んだ内容に対する考えや態度を表明させる評価発問を用い、書き手の伝えようとすることを主体的に考えたり判断したりしながらとらえることができるようにさせる。

(2) 手だて２　内在化のための音読活動の工夫や充実

機械的な音読に終始するのではなく、意味のまとまりごとに間をおいて繰り返し音読させたり、丸暗記ではなく、絵やキーワードなどを手がかりとして、ある程度の分量がある段落の意味内容を聞き手に伝えることを目標に暗唱に取り組ませたりするなど、音読を意味内容を意識した活動になるよう工夫し、語いや表現の内在化を促す。

３　成果と今後の課題（○＝成果、▲＝課題）

(1) 手だて１　読解の工夫や充実

○　読み取りのための設問の仕方を、読解のヒントとなるよう、情報を検索したり、概要や要点を把握したりするなどの文章を読む目的に応じて工夫したことで、内容の特定部分にのみとらわれることなく、段落や文章全体などの大きなまとまりに着目して文章全体の概要や要点を読み取ることができるようになってきた。

○　推論発問や評価発問を用いて読みを深めることで、文章を読み取る楽しさやおもしろさを生徒が理解し、文章全体を通して書き手が何を伝えようとしているかを、文章中の根拠に基づいて読み取ることができるようになってきた。

▲　教師が与えた設問が文章を読み取る際のヒントとなり、ある程度の分量がある文章を前にしても、抵抗なく文章全体に目を向け内容を理解することができる生徒が増えてきた。しかしながら、読解のヒントとなる、いわゆる「指導の足場」を少しずつ外しながら自分の力で文章を正確に読み取り、さらに、書き手の伝えようとすることをとらえる力をはぐくんでいくためには、中学校３年間を見通した継続した取組が必要になると思われる。今後、CAN-DO リストの活用を図りながら、ロングスパンの中での計画的・系統的な指導の必要性を感じる。

(2) 手だて２　内在化のための音読活動の工夫や充実

○　日本語の訳を活用した、意味のまとまりごとに間をおいての音読の練習を繰り返しながら、最終的には文章の意味内容を聞き手に伝えることを念頭に置いた暗唱をさせる経験を積み重ねることで、意味を伴わない、短期記憶に頼った機械的な暗唱を脱却し、語いや表現の内在化へつなげることができた。

▲　語いや表現の内在化のさらなる促進のためには、該当単元で学習した文章の意味内容を意識した音読や暗唱の活動を、帯の時間を活用するなどして、複数単元にまたがって繰り返し行っていく必要性を感じた。